

芭蕉が伝わる蚶満寺

先代の能忍和尚は「おくのほそ道雑考」を書いていました。そのなかには、芭蕉は松島と象潟を見比べるため、また西行法師ゆかりの地に憧れていたことなどが書かれています。しかし、私自身芭蕉について特別に伝えられたことはありません。それは伝えるものではなく、伝わるものであり、芭蕉ゆかりのお寺ということが代々自然に伝わっていくものだからです。

芭蕉は、俳句に興味がある人や自ら俳句をたしなむ人にとっては必ずと言っていいほど聞く名前です。現代の俳句の世界、当時は俳諧でしたが、その文化を確立した人ではないでしょうか。

そんな芭蕉の魅力に引き付けられ『おくのほそ道』を巡り足跡をたどる人も多く、ここ蚶満寺も東北の地として、その一つに数えられています。

蚶満寺を訪れた人々

蚶満寺には昔から著名な人物が訪れた際の芳名帳としての旅客集があります。その中には多くの歴史上の人物の名を目にすることが

芭蕉と今野家、そして金家へ

芭蕉については先代から伝えられたのではなく、私の名字「金」に興味があり、何時何処から来たのか、そのルーツを探りたいと思っていました。そして、蚶満寺の檀頭であり親交が深いことや芭蕉をもてなしたことなどを知るに至りました。よく、今野又左衛門は殿様ですか？と言う人がいますが、殿様ではなく名主なんです。家の裏にこんもりとして竹で覆われた山が象潟城址（仁賀保氏居城）として遺っており、それを囲む二ノ丸は現在、地名となっています。

酒田で芭蕉をもてなした寺嶋家 今野家のルーツと人物像

芭蕉の象潟での動向は前項で紹介されていますので割愛しますが、酒田で芭蕉をもてなしたのは誰だったのでしょうか。

芭蕉は酒田の浦役人で豪商の寺嶋彦助宅で伊東不玉たちと連句会を開いています。寺嶋彦助は元は尾張鳴海（現在の名古屋市鳴海区）で本陣を営んでいた寺嶋業言（芭蕉門人の鳴海六俳仙の一人）の一族です。芭蕉は『おくのほそ道』の旅前・旅



芭蕉ゆかりのお寺 伝えるのではなく伝わる 歴史と観光のポテンシャル

蚶満寺 40世

くまがい ゆうにん

熊谷右忍和尚

できます。有名どころでは平賀源内や小林一茶あたりです。近年では先代の能忍和尚と戦友の司馬遼太郎、そして、平成19年に台湾元総統・李登輝が訪れて記憶に新しいです。ただいたことが記憶に新しいです。また、旅客集にはありませんが、夫の退職金でサイドカー付きのバイクを買って、『おくのほそ道』を巡っている夫婦が立ち寄ったり、イスラエル人御一行が訪れた際は、珍しいヘブライ語の『おくのほそ道』を見せていただきました。

二十四世・覚林和尚の存在

ご存知のとおり、文化元年の象潟地震により隆起してしまつた十九島を本荘藩の開墾計画から守つたのが、二十四世・覚林和尚で

す。命を賭して守るべきものを守りとおす姿は、お寺の尊厳や物の道理を行動で示し、結果として、今もその貴重な景観が遺っていることに繋がっています。禅宗のお坊さんとしての本道を示した方ではないでしょうか。その想いを蚶満寺としても、「覚林和尚を顕彰する会」の皆さんとともに後世に語り継いでいきます。

歴史と観光のこれからに期待

多くの方が「蚶満寺は芭蕉ゆかりのお寺」という認識ではないでしょうか。確かに蚶満寺は万人受けする観光地としてのお寺ではなく、多くの場合、鳥海山や獅子ヶ鼻湿原を訪れた際に足を延ばしてみようという感じでしょう。歴史の地としては、やはり芭蕉に興味がある方がほとんどで、ほかにも境内に自生する植物に興味を持つ学者などの客層に限られています。

しかし、前述の「覚林和尚を顕彰する会」による継承活動や「十九島の松をまもる会」、「島守り」による島々の保全活動は、景勝地を後世に伝えるという大きな意味を持ち、観光地としても生きてきます。歴史と観光を繋いでくれる観光案内人の皆さんやボランティアガイドの協力もあり、鳥海山を核とした本市が持つポテンシャルに期待したいと思えます。

後に鳴海に滞在し、何度か名古屋にも足を運んでいたようです。

そして、酒田へ進出した初代・寺嶋又兵衛の二代目・利兵衛と寺嶋彦助が芭蕉をもてなしたのだそうです。しかし、寺嶋家には後継ぎがいなかったことから養子をもつたことになりました。その養子を出したのが今野家で、三代目・寺嶋理兵衛となります。その後、寺嶋から尾関に名字が変わり、尾関理兵衛と名乗ることになります。（金家系図より）なぜ尾関と名乗るようになったかについては、母方が象潟町関の生まれで、尾張と関の頭を取り尾関としたとあります。話を今野又左衛門に戻し、彼の人物像を見てみると、したたかな面が見え隠れしています。豪商はもちろんのこと、武士との繋がり

芭蕉をもてなした 今野家と酒田の寺嶋家 自身も俳句をたしなみながら

今野又左衛門家 27代目

こん みちひろ

金道博さん

も見てとれます。まさに廻船問屋の世界です。また、これだけに留まらず、あらゆる富裕層に繋がりがあつたことが分かってきました。寄合だけでなく、句会を開催しては商談をしてさらなる繋がりを作る、もちろん俳句は楽しみの一つとして定着はしていたようです。このように別の一面が見れるところが歴史の楽しみの一つですね。今、私の家から蚶満寺さんに管理移行した旅客集についてデータ作成を計画中です。

俳句をたしなみながら

ところで、私も俳句をたしなんでいます。ポオクとしている時や、パツと思いつく時にメモしながら、今も初心者の気持ちで続けています。最後に私の好きな芭蕉の句を三句紹介します。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
酒田での一句。方丈に座して簾を捲ばく『おくのほそ道』

象潟の章に情景が重なります。

雲の峰いくつ崩れて月の山

月山での一句。大景と月山の雄大な姿が目の前に開けます。

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

象潟での一句。防波堤のない頃の鰐淵が想像されます。

※この執筆に関しては、広瀬毅彦氏著『奥の細道を支えた人々』を参考しています。